
Sugarless

青葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S u g a r l e s s

【Nコード】

N 7 7 5 1 X

【作者名】

青葉

【あらすじ】

新蘭パラレルです。この話では新一と蘭は年が2つはなれていると言う設定です。

幼いころ、新一と出会い、

仲良くなった蘭。幼いながらも新一の事が好きだと思うようになった蘭だったが、学年の違う2人はやがて交流がなくなってしまふ。

それから数年、高校生になった蘭が見たものは、学校で1番の人気者となった新一の姿。久しぶりに話して、やはりまだ新一が好きだと自覚する蘭。蘭の事を大切に思う新一。甘いけど、甘くない、2人の恋。

1 番最初の思い出（前書き）

他のもどん詰まってるクセに新連載はじめました。
これまたのんびり更新になります。

1 番最初の思い出

ある日の毛利家

「おかあさん。どこに行くの？」

「お母さんのお友達のところよ。蘭も来る？」

「うんっ。行く！」

そうして幼い蘭が母、英理に連れてこられたのは

「わゝ、おつきいお家だね！おかあさんのお友達、ここに住んでるの？」

小さな子どもにとっても、大人にとっても、巨大な邸宅。
そして蘭がそこで出会ったのは

「あらゝ、英理ちゃんいらっしやい！

その子はもしかして蘭ちゃん？かわいいわねゝ」

母である英理に負けず劣らず綺麗な女性と。

「じゃあ蘭ちゃんの手前は新ちゃんに見ててもらおうかしら？
新ちゃん！本ばっか読んでないでちょっと来なさい！」

「なんだよ母さん。今いいところだったのに」

ぶつくさ言いながら現われた自分よりも少し年上と見られる少年。

それが、蘭の新一との初めての出会いだった。

入学式の朝（前書き）

最初だけ連続投稿。

入学式の朝

それは、幼い頃の優しい記憶。

有希子に呼ばれ、蘭の相手役を任された少年は渋々ながらも蘭に話しかける。

『オレはくどうしんいち。5さい。おまえは？』

『らっらん！もうりらん。3さいです』

幼稚園の同級生以外で初めて話す、年上の少年に対し、少し緊張しながら蘭は答えた。

それだけで会話が途絶えてしまう。

母親たちはすでにおしゃべりに夢中だ。

どうしよう、と蘭は困り顔で英理をみやるが、母は当然気がつかない。

『ふえ』

あまりの心細さに泣き出しそうになったその時、わずかに開いたその口になにかが放り込まれる。

その放り込まれた“何か”は甘く、ほろほろと口の中で溶けていく。びつくりして目を開けるとそこには新一の姿が。

新一は目を丸くしてる蘭に笑いかけると、

『母さんにもらったおかしだ。』

泣いてたらしよっぱくなるぞ』

そう言うなり、蘭の手を引つ張り、家の外へと連れていく。

『ねっ、ねえ、どこにいくの!?!』

急に引つ張られ、慌てて靴を履きながら、新一に訊ねる。

『いいから、ついてこいよ!』

そしてそのまま連れていかれた場所は

『わあっ、すごい!お花がいっぱい!』

野の花が満面に咲く花畑。

驚きながらも嬉しそうにする蘭に新一は得意げに笑う。

『まえに母さんが言ってたんだ。ここは春になるとすごくきれいだった』

読書を中断させられ、自分の相手をするのを嫌そうにしていたのに、わざわざこんなところに案内してくれた。そう思うと蘭は嬉しくて新一の抱きついた。

『ありがとう、しんいちおにいちゃん!』

『わ、ちょ、やめろってば!』

だいたいなんだよ“しんいちおにいちゃん”って!』

いきなり抱きつかれて赤くなり、蘭を引き離しながら新一は言う。

『だって、しんいちおにいちゃんわたしよりおにいちゃんでしょう？』

年上の男の子はおにいちゃんと言うのだと教えられていた蘭は不思議そうに訊き返す。

新一を“おにいちゃん”と呼んではいけないのか、と。

『だからって別におにいちゃんなんてつけなくてもいいだろ？』

しんいちおにいちゃんと呼ばれたくなかった新一はそれを辞めさせようとする。

『えゝ、だったらどう呼べばいいの？』

他にどう呼び方があるのかと不満のにじみ出た声で蘭がもう1度聞く、

『しんいちって呼べばいいだろ！？』

オレもおまえのこと、らんって呼ぶからさ！』

そう、返ってきた返事に、蘭はぱあっと顔を輝かせる。

『うん！じゃあそう呼ぶ！だから、しんいち、これからわたしとあそんでくれる？』

年下の少女のそんな無邪気な問いかけに、読書の邪魔をされた不機嫌さをすっかり忘れた新一は、

『しょーがねーな！いつでも家にこいよ！』

力強い笑みと共にその手を差し伸べた。

幼い蘭はその手をとろうとし、手を伸ばし

ピピピッ ピピピッ

「あ、れ・・・？」

どこか気の抜けた声を出しながら蘭は目を覚ます。
夢の中で伸ばした手が空を掴んでいる。
ということは、

「夢、か・・・」

そう、あれは夢だ。

もう蘭は3歳ではない。

母である英理も父と喧嘩したまま別居中。

父は刑事を辞め、今は売れない探偵だ。

あれから十数年経ち、蘭も今日から高校生になる。
でも、

「なつかしい夢だったな」

小さい頃、1番仲の良かった少年を思い出す。

この十年ばかりの間に、彼とはすっかり距離が開いてしまい、彼の
小学校卒業と同時に毎年やりとりしていた年賀状すら出さなくなっ
てしまった。

おまけに蘭は受験当日、風邪で寝込んでいたため、新一の行った帝
丹中学に通えなかった。

だが、今日からは、

今日からは彼と同じ帝丹高校に通う事が出来る。

べつに新一がいるから帝丹を受けたわけではない。

中学の時のリベンジだ。

だから、新一のことなど関係ないと言えばそうなのだが、

「会いたいな・・・久しぶりに」

たった今まで見ていた夢のせいか、むしうに会いたくなった。

1年生と3年生。

学年は違えど同じ高校なんだから、きっと会えるよね、と思い、蘭
は朝の支度を始めた。

入学式（前書き）

お久しぶりです。

今回は入学式。

・・・なかなか新一が出てこない！

入学式

朝食をしっかりと摂り、真新しい制服に身を包んだ蘭は父と共に帝丹高校へ向かった。

校門には、母である英理の姿。

蘭の入学式の為にわざわざ仕事を調整して来てくれたのだ。

それが嬉しくて蘭は声を上げて子供の様に英理の元へかけよる。

「お母さん！」

「蘭、おめでとう。制服似あってるわよ」

「ホント！？ありがとう！」

嬉しそうに笑う蘭に、英理は『ちよつと動かないでね』と一声かけるとその首元のネクタイに手を伸ばすと、1度ほどいてからしっかりと結びなおす。

その後1歩退いてから蘭の全体を見渡し、OKを出す。

そこへ丁度小五郎がやって来る。

「おう」

スーツのポケットに両手を突っ込みながら現れた夫を見て英理が顔をしかめる。

「ちよつとなーに、その格好？ネクタイも曲がってるじゃない！」

娘の入学式くらいしつかりしなさいよね？」

言いながら、先ほど蘭にやったのと同じように小五郎のネクタイを締め直す。

「まったく、朝っぱらから口うるせーオバサンだな・・・ぎよわ！」

顎を上げながら文句を言った小五郎が潰された鳥の様な声を出す。英理がネクタイを思いつきり締めたのだ。

「口うるさくされたくないのなら、ちゃんとすることね、又ケサク髭オヤジ」

絶対零度の声で言われた小五郎が、『なにおう！？』と歯をむき出しにし、英理を睨みつけ、英理もまた負けじと相手を睨む。
一触即発モードとなった2人を引き戻したのは、他ならぬ娘の蘭だった。

「もう！2人ともこんなところで止めてよ！
どーして会った時にこうなっちゃうのよ！？」

泣き出しそうな声に小五郎と英理は我に返る。

「う、ごめんね蘭。今日は貴女の入学式なのに・・・」

「おい、蘭！心配すんなって。別に俺達は本気じゃないんだし」

慌てた小五郎たちはあの手この手で蘭を宥め、今夜は親子3人で食事することを約束し、ようやく蘭の機嫌を取り戻した。

機嫌を取り戻した蘭に、さらに嬉しい事が起きる。講堂の前に貼っ

であるクラス分けを見ると、小学校からの親友の鈴木園子と同じクラス、1年B組になったのだ。

校門の前にある【帝丹高校 入学式】と書かれた看板の横に立ち、まずは蘭1人。次に蘭と英理、蘭と小五郎。そして最後に近くにいた誰かの父兄に頼み親子3人で写真撮影をし終わると丁度新入生集合時間となり、蘭は講堂横の集合場所に向かった。

残された小五郎と英理はやや気まずそうにしながらも、写真を撮っている間にお互いへの不満も流れたのか、仲良く講堂へと入っていた。

帝丹高校の入学式はいたって普通のもので、教頭の司会の下に進められる。

『新入生、入場』

マイクで拡張された声が響くと、講堂の入口から新入生が厳かに入場してくる。

全員が入場し終わると着席。

その後、点呼。

クラス毎に担任が名前を読み上げ、名前を呼ばれた1年生達が返事をしながら次々と立つ。最後の1人が呼ばれると今度は『新入生誓いの言葉』だ。

再び教頭がマイクの後ろに立つ。

『新入生、誓いの言葉。新入生代表、1年B組、もりやまゆうき森山雄貴』

「はい！」

呼ばれた生徒のはきはきとした返事がこだまする。

B組と言うと、蘭と同じクラスだが、知らない名前だった。

どうやら園子も知らないらしく、前方の席で首をかしげている。

だが新入生代表と言う事は入試の成績がトップだった、ということだ。

どんな人物なのか、気になる。

その森山と言う生徒は蘭の座っている列の1番右端から通路に出るとステージへと歩いていく。

彼がステージに上がり、校長の前に立つと、女生徒から黄色い声があがる。

「ねえあの人、カッコ良くない？」

「しかも成績トップってことは頭もいいんだよね？」

「どこ中の人！？」

「いいな、あたしもB組が良かったあ」

そんな女生徒のざわめきは、教頭の『静粛に』の一言で徐々に小さ

くなる。

騒ぎが落ち着いたところで誓いの言葉が始まる。

『宣誓。本日入学を許可されました私達、240名は帝丹高等学校の生徒としての自覚と誇りを持ち、十分に勉学に励むことを誓います』

マイクを通してもはつきりとわかる、心地よい声にまたもや女生徒が騒ぎ出す。

教頭は、もはや注意する気も失せたのか、何も言わない。

その後、校長の長い長い祝辞が続き、入学式は終わりを迎えた。

入学式（後書き）

うーん、高校の入学式ってこんなんでよかったっけ？とか思うけどまあいいか！

ちなみにこの誓いの言葉は青葉が高1の時に言われたのを少し変えたものです。

あと、ちよつとネタばれだけど、今回でましたオリキャラの森山君、この子はまだ出番があります。

新一登場までもうちよつとお待ち下さいゝm（――）（mゝ

1年B組(前書き)

蘭が蘭っぽくないかな・・・

1年B組

入学式が終わると、次はそれぞれの教室へ移動した。

担任を先頭に一列に並んで講堂から教室に向かう。

蘭は園子と話したかったのだが、教室に入るとそのまま出席番号順に着席となったので、とうとうそのチャンスは巡ってこなかった。

自分の席に座り、周囲に知り合いがいないか確認してみるが、生憎、B組には園子以外に知った顔がない。少し不安に思いながら教卓の方を向こうとしたその時、隣の席の人物と目があつた。

「あ」

その人物は蘭と目が合うと、につこりとほほ笑みかけてくる。

邪気のない笑みに今まで抱いていた不安が薄れ、蘭も相手に薄く笑い返すと前を向く。

その人物

先ほど新入生代表を務めた少年、森山雄貴

はほんの一瞬、蘭の横顔を見、同じく前方に視線を向ける。

担任の挨拶が始まった。

「はい、皆さん。まずは入学おめでとう！」

私はB組の担任の東田ひがしたと言います。

受け持ちの教科は数学です。以後、よろしく」

そう極めて簡潔に自己紹介を済ますと、東田は生徒全員に自己紹介をさせていった。

自己紹介の順番は男女交互で、男子の1番の次は、21番の女子、

2番の男子、22番の女子・・・と言った感じだ。

「26番、鈴木園子です！出身は米花中！

部活はテニスやってました！

ちなみに恋人募集中です！」

親友の元気の良すぎる自己紹介にB組はどっと湧く。

そうこうしているうちに、あっという間に順番が1個前まで来た。

「16番の森山雄貴です。出身中学は杯戸南中。

部活は何に入ろうか迷ってます。よろしくおねがいします」

入学式のとくと同じく、彼の登場に女子が賑やかになる。
それが治まってから蘭は立ち上がった。

「えっと、36番、毛利蘭です。米花中出身。

あ、空手やってます。よ、よろしく！」

緊張のあまり最後の方は噛みながら着席する。

その様子が可笑しかったのか、周りの生徒たちがクスクス笑い、園
子は額に手を当てている。

蘭は恥ずかしさで赤くなりながら下を向く。

だから、気づいていなかった。

隣から、視線を向けられていることに

生徒全員の自己紹介も終了し、担任による今後の説明が終わると、ようやく今日の学校が終わった。

蘭は配られた資料を鞆につめ、帰る支度をする。と園子の元へ行った。

「園子、また同じクラスでよかった！」

「私もよかった！蘭と一緒に宿題とか見せてもらえるもんね！」

「もー、園子ってば！」

「あははは、冗談、冗談。」

ま、半分は本気だけどね・・・

今日はお母さんも交えて食事なの？」

元気に笑いながら園子が訊ねてくる。

それに対し、蘭は嬉しそうに答えた。

「うん。一旦家に帰ってから着替えて行くんだ！」

「そっか！良かったわね。」

私も今日はウチで盛大なパーティーよん」

そう言いながら鞆を持つと園子は蘭と一緒に教室を出る。

2人は玄関のところで自分たちを待っていた両親と合流するとそれぞれの家へ帰って行った。

1年B組（後書き）

なぐんか微妙な終わり方ですね・・・
すみません（><）

懐かしい人（前書き）

お久しぶりです!!

いつの間にか放置1週間・・・

学祭終わったら多分もう少し更新できるかと。

懐かしい人

入学式の翌朝、蘭はいつものように台所で朝食を作っていた。だが、中学の時と少し違う点がある。

蘭は朝食を作りながら、お昼のお弁当も作っていた。中学時代は給食あったのだが、高校ではそれがない。

その代りに生徒達は購買でパンを買うか、学食を使う。

しかし購買にしても学食にしても、お昼時は非常に混雑するサバナ地帯と化する。

それを避けるためには、弁当これしかないのだ。

昨夜の英理を交えての親子3人での食事は、英理と小五郎がなかなかいい雰囲気になっていたので少しばかり機嫌がいい。

鼻歌を歌いながら作ったおかずを2つの弁当箱に詰めていく。

綺麗な空色のが蘭の弁当箱。よくある様な銀色のは小五郎のだ。

いつもは父にお昼を作って置いたりはしないのだが、今日は機嫌がいいので特別だ。

しつかりと中身を冷ましてから蓋をすると自分の分をハンカチで包んで鞆に入れる。

それから小五郎を叩き起してから一緒に朝食をとり、使った食器を素早く洗うと鞆を掴み、学校へ向かう。

「いってきま〜す！お父さん、グーダラしないでちゃんと仕事するのよ！」

あと、今日のお昼はそこにあるから！」

毛利家の財布を握る蘭は、目を離すと昼間からビール片手に競馬又

は沖野ヨーコのビデオ観賞をする父に釘をさすことも忘れなかった。

蘭は帝丹高校の校門に着いた時、怪しい人影に気づいた。
その人影は門のところに隠れて、中の様子をうかがっている。

（まさか不審者！？）

こんな所でこそそと中を覗いているなんて、不審者に違いない。
そう思った蘭は迷わずにその人物に近づくと声をあげる。

「ちょっとあなた！何してるのよ！？」

するとその人物はビクリと肩を大きく震わせて振り向く。
それと同時に蘭は気づく。

相手が、帝丹高校の制服を着ていることに。

しまった、間違った。と後悔に襲われていると、振り向いた恰好の
まま硬直していた相手が口を開く。

「ら、蘭・・・か？」

「え？」

相手の口から自分の名前が飛び出したことに驚き、その人物の顔を
まじまじと見つめる。

そこにあるのは

記憶にあるよりもずっと大人びた、整った顔立ち。

昨日見た夢よりも、伸びた背。

あの頃よりも幾分低くなった、けど耳に優しい声。
ふと会いたくなった、あの人。

「しんいち・・・？」

工藤新一、その人であった。

「おはよー、蘭」

「あ、園子おはよう！」

朝の教室で、1番最初に会った親友に挨拶をする。
が、どうも園子の様子がおかしい、と蘭は感じた。
いつもは元気いっぱいなのに、今日はダルそうに見える。

「どうしたの？園子、なんか元気ないよ？」

心配になって声をかけると、力の抜けた返事が返ってきた。

「あつたりまえじゃないのよ。」

むしろなんで蘭はそんなに元気なのよ？」

「え、元気ってそれは・・・」

会いたいと願った人に会えたから。

先ほどの新一との再会を思い出して、瞬間、蘭の顔が赤くなる。
そしてそれを見逃す園子ではない。

「あゝ、赤くなっちゃって！」

なにに！？素敵な人でもいた！？教えなさいよ」

途端、元気になった園子が蘭の腕を掴んで揺さぶる。

「あ、え、そんなじゃないわよ！」

ところでどうして元気ないのがあたりまえなのよ？」

赤くなつた頬をさらに赤くしながら蘭は話を強引に戻す。
すると園子は『ごまかしちゃって』などとブツクサ言いながらも

理由を言った。

「だって今日はテストじゃない！テ・ス・ト！
まあーったく、せっかく受験終わったのにいきなりテストなんてや
ってられないわよ」

「へ？テスト？」

蘭にとっては寝耳に水で、思わず間の抜けた声をだす。
すると今度は園子も驚いた顔になる。

「蘭、アンタまさか忘れてたの！？入学のしおりに書いてあったじ
ゃない！」

“入学式の翌日はテストがあります” って！

「・・・そう言えば」

そんなこと、書いてあった様な気がする。
今の今まですっかり忘れていた。
蘭の顔がさっと青ざめる。

勉強、していない。

もう結果は、決まったようなものだった。

懐かしい人（後書き）

新一登場！（ようやっと）

なぜに彼が校門付近でこそこそやってたかは後でわかります。
たいした謎ではないのですけどね・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7751x/>

Sugarless

2011年11月17日12時40分発行